天下の門 風雅横丁

金光　節

朝日新聞社●

著者紹介

昭和7年生れ。

昭和23年福岡県立福岡高女卒。

金光不二夫氏(翻訳家)夫人。

モスクワ風呂屋横丁 **480 円**

著　者　金光　節

発行日　昭和43年8月20日

発行者　大田信男

印刷所　明善印刷株式会社

発行所　朝日新聞社　東京　名古屋　大阪　北九州

© KANEMITU SETU 1968

まえがき

ソ連という国も、いまではもはや「ナゾ」の国ではありません。政治、経済についても、学問、芸術についても、今日では非常に多くのことが知られているし、知ろうと思えば、まだまだ多くのことを知ることができます。けれども一般にはまだまだ知られていないことの方が、あるいは一面的にしか知られていないことが多いと思います。とくにロシア・ソビエト社会の風俗、習慣、人間関係をふくめたソ連人の生活感情や生活様式については、まだまだ十分に紹介されているとはいえません。

もっとも、ソ連にかぎらず一般に外国人の生活様式や生活感情を正しく紹介するということは、いうべくしてなかなかむつかしいことです。わけてもソ連という国は、わたしたちとは全く勝手のちがう社会経済体制をもっている国ですから、この国民の生活の内部にとけこむこと自体が容易なことではないのです。ですから、これまでもすでに数多くの旅行者がそれぞれの紀行のなかで、あれこれの見聞をつづっておられますけれども、やはりそれらは、ほんの部分的ないし一面的な観察にすぎないというそしりをまぬがれません。もちろん、こういう断片的な見聞をもって一般化することはたいへ

ん危険なことです。

そこでわたしはかねてから、どなたでもよい、ソ連に一定期間住みついて、ロシア人とともに喜怒哀楽する機会をもった人が、その「生活の記録」を、できるだけ丹念につづってくれる日のくることを待ち望んでいました。いま、わたしは金光 節さんの「モスクワ風呂屋横丁」の全文を読みおわって、これこそわたしの期待どおりのものだと、ヒザをうって喜んでいるところです。

著者はソ連の科学関係の翻訳を主としてやっている夫君とともに約二年間モスクワに滞在し、ロシア人のアパートで、普通のロシア人といっしょの生活をしてきました。そして、その日その日の生活をとおして、ソビエト社会の特異な種々相を、こまかく、するどく観察してきています。その観察は衣食住から風俗、習慣、人情、さらには四季の移りかわりから年中行事のあれこれにいたるまで、まことに幅ひろくゆきわたっています。

だから、この本には、ソビエト社会についての、いろいろ豊富な話題があります。わたしは、そのひとつひとつについて興味をもち、共感しました。いかにも日本の女性らしい観察のこまかさと素直さ、どれもこれも肯けるものばかりです。「国を出てから多少愛国的になりすぎたかも知れない」という著者自身の感想もありますが、それはそれとして、この本は、ソ連の生活についての、正直で妥当な見方を代表していると思います。

文章がさらさらと美しく、いろんなロシア人との対話が生き生きとしていることも、この本を楽し

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

い読みものにするでしょう。いずれにしても、またひとつ隣邦ソ連を理解するのに役立つユニークな書物がふえたことを喜ばしく思います。

一九六八年七月一日

朝日新聞大阪本社編集局長
元モスクワ支局長
秦　正流

《目　次》

I　台所から見たモスクワ

おとぎばなしのように！　3
モスクワの冬ごもり　23
ロシアの暮と正月　29
冬の店と買物　37
夏の果物・野菜　53
魚屋さん　56
クリーニング屋さん　65
病気をしたら　74
美容院　81
おしゃれのことなど　92
モスクワのお風呂屋さん　103

結婚会館 111

II モスクワの休日

春を迎えるモスクワ 121
復活祭 125
カッフェ〝わかもの〟 133
キエフへの旅 139
恋に関する一〇四頁 154
あやうく交通事故 163
航空ショー 173
冬のリクリエーション 177

III 変りゆくソ連

老ボリシェビイク 185

宇宙飛行士の死　193
一九六七年メーデー　200
新学期はじまる！　204
国際婦人デー　221
革命五〇周年を迎えるモスクワ　222
モスクワの日本人　226
ユダヤ人のこと　239
ロシア人気質――ずるさと素朴さと　244
さようなら、モスクワ！　257

装幀・木幡明介

台所から見たモスクワ

I

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

おとぎばなしのように！

ソ連の科学関係の翻訳を主としてやっていた夫のところに、突然ソ連行きのお話がもちこまれたのはうっとうしいつゆのさ中の六月の末、駐日ソ連大使館科学アタッシェだったPさんからでした。

このお話は、それまでにほんの少しばかりロシア語をかじっていた私を有頂天にさせました。しかし二年前に一度訪ソしたことのある夫にとっては、向うの現状もある程度わかっており、また二年間日本をはなれることによって生ずるマイナスの面とプラスの面を天秤にかけて大分考えねばならなかったようです。それに老齢の父と病身の妹を後に残していくことが、さらにマイナスの重みを加えました。それでも気の若い夫は、「何でも見てやろう」の意気十分、簡単な試験として渡された翻訳をしあげ、提出すると、あとは大使館にまかせて、私たちは予定通り太海の海岸（千葉県）へ出かけ、そこでのんびりと十日ばかりを過して八月十日すぎ帰京、そしてソ連行決定の通知を受けとったのです。

まもなく在モスクワのプログレス出版所から夫、それに私をソ連に招待し、「二年あるいは三年の契約で働いてもらう。その往復の料金はこちらで負担する」という招待状が届きました。夫の資格は同出

版所の翻訳者。しかし唯一の連絡機関である当の駐日ソ連大使館では、最初話をもってこられたPさんが帰国、その後人事の交替や夏の休暇がひっかかって、「一カ月以内にいって欲しい」という要望だけで、契約書も届いているのかいないのか、一向に要領を得ず、結局モスクワのプログレス出版所へ「契約書送れ」の電報を直接打とうということになりました。

一方、私たちは、編集者として同行されるSさんとも話合い、出発を九月二六日ときめました。それで、まず、丁度夏休みで帰国されていたモスクワの演劇大学のSさんにお電話するやら、モスクワの夫の友人にあてて様子をきくやら、また朝日新聞前モスクワ特派員の秦さんのお宅に伺って、奥様に準備のための貴重な助言を頂き、向うの様子はほぼつかむことができました。それに老齢の義父が、「待っているからしっかりやってきなさい」と言ってくれたことが、夫を安心させ、その決心をあらためてかためさせた様でした。

それからの忙しかったこと、ソ連で一番不足しているという衣類、それに化粧品、身のまわりのものを書き出しては揃え、夫はSさんとも相談して、向うに着けばすぐに必要になる参考書類など、三〇〇キロ近くのものを揃えました。そしてさらに日本のお米がなければ……という夫が、この上にお米一俵をもっていくとだだをこね、やっと思いとどまらせたものの、「パンとソーセージで我慢できる」というのんきな私はあてにできないとみたか、醤油、味噌、うどん、わかめ等、店を歩いて大量に仕入れてきました。後日、これらの日本食がどれだけ私たちを助けてくれたか、このことだけは夫に頭があがり

ません。この食糧の重量約八〇キロ。これでもっていくものは大体揃いました。その間にパスポート、ビザの申請、予防注射、外貨持出しの手続きも日ソ・ツーリストビューローに依頼してすすめ、体はいくつあってもたりない忙しい日が続きました。

しかしこうして「契約書送れ」の電報の返事を待っているうちに、出発の九月二六日は一日一日とせまってきたのです。「契約書もみないで渡ソする」。これは夫の親しい友人たち、特にソ連事情に通じている二、三の方に、当時その無謀さをはげしくたたかれましたが、自由業で、時間的にも比較的余裕のある夫は「もしも向うで、条件があわなかったら、その時はソ連を一周して帰ってくるだけでもいいさ」というのんきさ。

こうして二軒分四〇〇キロに近い荷物は、出発前日の二五日に、横浜の税関へ運びこまれ、契約書は受けとらないまま、私たちは翌日の出発を待つことになったのです。

これらに要した費用は、持出しの外貨三六万円を含めてほぼ六〇万円。私のとっておきの一〇万円も供出し、とにかくこの六〇万円を捻出するのに一苦労。

二六日、友人や夫の姉妹、実家の両親や姉弟に送られて横浜をたってからモスクワへ、そしてモスクワについてアパートに落着くまで約一〇日間の様子は日記によっておつたえしましょう。

▼九月二六日　晴▲

一二時。無数のテープをきりながら、船は静かに岸壁をはなれる。バイカル号五〇〇〇トン、大きな

船体と中央桟橋の間には、黒い海水がだんだんひろがっていった。みなの顔がみえなくなってからも、姉のふるピンクのハンカチがいつまでも遠くにゆれ、船はむきをかえて、太平洋に向った。

ソ連へ、モスクワへ、私の夢はかなえられた。胸がはずむ。しかし、「あまりソ連を知らなすぎるヨ」「大変な所だヨ」というそれを抑えるような夫や、その友人たちの言葉には半信半疑。そういえば、出発までのソ連大使館の連絡の悪さ、無責任さはなんとなく気にかかる。

私たちのキャビンは二等の四人部屋、しかしソ連側の好意で二人だけである。まもなく「ソンケイスル　ジョーキャク　ノ　ミナサマ！」と愛嬌のある日本語で昼食の案内がある。同席は上品な西ドイツの婦人とその坊や。「コノボッチャンハ　モライマシタ。トテモイイ　ボッチャンデス」とその婦人。食事には一等、二等の等級はなく、みな同じものを食べているらしい。二六号台風の余波を受けて、船はものすごくゆれ出した。なんともいえない不快な気分である。船酔止めの薬をのんで、夕食までベッドに横になる。船体が傾くとともに頭と足がかわるがわる上下の壁までズズズズと流れる。

▼九月二七日　晴▲

朝食は紅茶、半熟玉子、バター、パン。紅茶と一緒に出た角砂糖は、かたくてとけにくいソ連製である。「これはガリガリ歯でかみくだきながら、お茶をのむんだヨ」と夫。角砂糖の一つを左手につまむと、「エイッ」とかみくだいて一かけらを口に入れ、右手で紅茶茶わんからお茶をのむ。残りを左手にもったまま少しずつかじっては右手でお茶をのむ。こんなにかたいお砂糖があるものかと面白い。船室へ

もどり、またゴロリとベッドに横になる。もう立ってはいられないほどだ。食事のたびに食堂へくる人たちの数がへってゆく。だが食しんぼうの私はまだ大丈夫である。食欲はないのだが、もしやお米の御飯が、もしや新鮮な野菜が……、とそれをたよりに食堂へ足をはこぶ。もはや、ロシア料理は鼻につき、お茶漬けの味が恋しい。「パンとソーセージ」でいいと言った手前、夫に言うこともできない。

昼すぎ二人で甲板へ出る。風は冷たく、強いが、海は真青だ。本州がうっすらと左手にみえる。

八時、サロンで夫が、ごついソ連製テレビを調整、遂に第一チャンネルをさがしあてる。「私の秘密」、もうこれも見おさめである。声もききとれないきたない画面に見入る。やがて司会の八木アナウンサーの顔がひどくゆがんだと思うと、プッツリと消えた。「今津軽海峡を通過した」というアナウンスがあり、

バイカル号上で日向ぼっこする乗客たち（中央・筆者）

時計を一時間すすめる。真暗な甲板で夫が南海優勝の瞬間をキャッチしたのを最後に日本のラジオ放送もきこえなくなってしまった。二冊の週刊誌をくまなく読みあげ薬をのんでぐっすりねむる。

▼九月二八日　晴▲

気分はずっとよくなった。海も静かだ。日本海である。朝から二人で何遍も甲板へ出る。陸地はまだみえない。甲板の赤、緑、青、黄などのしゃれた籐椅子に、オーバーを着こんだロシア人の女の船員さんたちが、残り少ない秋の日を真向から受けている。

昼すぎ前方にうっすらと陸地がみえ始める。五時、検疫官の乗った小舟が近づいてきて、バイカル号にぴったりと横づけになる。にわかに船内はあわただしくなる。音たかくあけられたり、しめられたりするドアの音、足早に行ききする船員の足音で、キャビンにいても、落着かない。

五時半、船がとまった。赤い屋根、白い建物が寒々とした空にまるで裸のように乱立している。すでに夕もやの中にあるナホトカはさびしい港町である。

ドルと円の申告（つまり持込み外貨を申告するきまりがある）に時間をとる。タラップを下りる。すでに異国の土地。その瞬間、この地への期待と不安が、身内にうずまく。

《НАХОДКА》（ナホトカ）のネオンのまたたく税関へ向う。出版所が電報でしらせてきたインツーリスト（ソ連の国営旅行社）の出迎えの姿はない。

税関吏の殆んどはマニキュアをしたネッカチーフの女性。私たちの前で、ある日本の商社の人たちの

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com